



美と愛をもった「しとやかな気品」

エッセー すまみさよし 須磨久善 写真 おおいでかずひろ 大出一博

1
SCENE

心に咲くバラ

バラのさきやきにそっと耳を傾けている女。微笑みながらも、なんとなく寂しげな眼差しが気になる。胸につかえる何かを秘めて、バラの香りに心を和ませているのだろうか。

バラの花言葉はご存じのとおり「美と愛」。彼女の花かんざしのピンクは「しとやかな気品」を表す。私の好きな黄色のバラは「ジェラシー」あるいは「冷めた愛」、なので贈るときには少々気にかかる。「不可能」の象徴だった青いバラもわが国のサントリー社の長年の努力が実を結び、その花言葉は「夢かなう」に変わった。

バラの歴史はとても旧く、メソポタミア文明が栄えた紀元前5000年にまでさかのぼる。古代のバラが人の目に留まって以来、数多くの人々がその美しさに魅了されてさまざまな色や形、香りを求めて交配が繰り返されてきた。今ではその数2万5000種類に及ぶといわれるこの花は、今でいうハイブリッドの女王なのだ。古来、バラと医学は深い絆で結ばれており、そのエキスは血液循環を改善して鎮痛効果をもたらす妙薬として珍重されてきた。バラの香りは心の高ぶりを鎮め胸の痛みを癒やしてくれることから、かのマリー・アントワネットもこよなくこの花を愛し、育み、その香りの中に身を置いたという。

バラに彩られた着物姿で花たちを見つめるこの女の、心はきっと暖かいピンク色に染まっているのだろう。

